

河口湖

伊藤左千夫

青空文庫

段ばしごがギチギチ音がする。まもなくふすまがあく。茶盆を
ふすまの片辺^{かたべ}へおいて、すこぶるていねいにおじぎをした女は宿
の娘らしい。霜枯れのしずかなこのごろ、空もしぐれもようど湖
水の水はいよいよおちついて見える。しばらく客というものな
かったような宿のさびしさ。

娘は茶をついで予^よにすすめる。年は二十ばかりと見えた。紅蓮^{ぐれん}
の花びらをとかして彩色したように顔が美しい。わりあい顔の
はば広く、目の細いところ、土佐絵などによく見る古代^{こだいに}女房^{ようぼう}
の顔をほんものに見る心持ちがした。富士のふもと野の霜枯れを
たずねてきて、さびしい宿屋に天^{てん}平^び式^{しょうしき}美人を見る、おおいに

ゆかいであった。

娘は、お中食ちゅうじきのしたくいたしましうかといつたきり、あ

まり口数をきかない、予は食事してからちよつと鵜島うじまへゆくから、舟をたのんでくれと命じた。

富士のすそ野を見るものはだれもおなじであろう、かならずみようにかくせいてきむげん隔世的夢幻の感にうたれる。この朝予は吉田の駅をでて、とちゆう畑のあいだ森のかげに絹織の梭ひの音を聞きつつ、やがて大噴火当時そのままの石の原にかかった。千年の風雨も化かりよく力をくわうることができず、むろん人間の手もいらす、一木一草ほく、そうもおいたたぬ、ゴツゴツたる石の原を半里あまりあるいた。富士はほとんど雲におおわれて傾斜遠とおなが長きすばかり見わたされる。目

のさきからじきに山すそに連続した、三、四里もある草木そうもくあるいは石の原などをひと目に見わたすと、すべての光景がどうしてもまぼろしのごとく感ずる。

予はふかくこの夢幻の感じに酔うて、河口湖畔の舟津ふなづへいでた。舟津の家なみや人のゆききや、馬のゆくのも子どもこどもの遊ぶのも、また湖水の深沈しんちんとせずかなありさまやが、ことごとく夢中の光景としか思えない。

家なみから北のすみがすこしく湖水へはりだした木立ちのなかに、古い寺と古い神社とが地つづきに立っている。木立ちはいまさかんに黄葉こうようしているが、落ち葉も庭をうずめている。右手な神社のまた右手の一角にまつ黒い大石が乱立して湖水へつきいで、

そのうえにちよつとした宿屋がある。まえはわずかに人の通うばかりにせまい。そこに着物などほしかけて女がひとり洗濯をやっていた。これが予のいまおる宿である。そして予はいま上代じょうだいて的紅顔きこうがんの美女に中食をすすめられつついる。予はさきに宿の娘といったが、このことばをふつうにいう宿屋の娘の軽薄な意味にとられてはこまる。

予の口がおもいせい、娘はますますかたい。予はことばをおしだすようにして、夏になればずいぶん東京あたりから人がきますか、夏は涼しいでしょう。鵜島には紅葉がありますか。鵜島まではなん里くらいありますなど話しかけてみたが、娘はただ、ハイというばかり、声を聞きながら形は見えないような心持ち

だ。段ばしごの下から、

「舟がきてるからお客さまに申しあげておくれ」

というのは、主人らしい人の声である。飯めしがすむ。娘はさがる。

鵜島は、湖水の沖のちようどまんなかごろにある離れ小島の話で、なんだかひじょうに遠いところでもあるように思われる。いまからでかけてきようじゆうに帰つてこられるかしらなどと考える。外のようすは霧がおりてぼんやりとしてきた。娘はふたたびあがつてきて、舟子かこが待つておりますでございますと例のおりていねいに両手をついていう。

「どうでしょう、雨になりはしますまいか、遠くへのりだしてから降られちゃ、たいへんですからな」

といえは、

「ハイ……雨になるようなことはなからうと申しておりますが」という。予は一種の力に引きおこされるような思いに二階をおりる。

宿をでる。五、六歩で左へおりる。でこぼこした石をつたつて二丈じょうばかりつき立つている、暗黒な大石の下をくぐるとすぐ舟があつた。舟子は、縞しまもめんのカルサンをはいて、大黒だいこくずきんをかぶつたかわいい老爺ろうやである。

ちよつとずきんをはずし、にこにこ笑つて予におじぎをした。四方の山々にとつぷりと霧がかかつて、うさぎの毛のさきを動かすほどの風もない。重みのあるような、ねばりのあるような黒ず

んだ水面に舟ふな足をえがいて、舟は広みへでた。キイーキイーと櫓ろの音がする。

ふりかえってみると、いまでた予の宿の周囲がじつにおもしろい。黒石でつつまれた高みの上に、りっぱな赤松あかまつが四、五本森をなして、黄葉くぬぎした櫟くぬぎがほどよくそれにまじわっている。東側は神社と寺との木立ちにつづいて冬のはじめとはいえ、色づいた木の葉が散らずにあるので、いつそう景色がひきたって見える。

「じいさん、ここから見ると舟津はじつにえい景色だね！」

「へい、お富士山はあれ、あつこに秦皮とねりこの森があります。ちよ
うどあつこらにめいます。へい。こつから東の方角でございます。
へい。あの村木むらこだ立ちでございます。へい、そのさきに寺がめいま

す、森の上からお堂の屋根がめいましょう。法華ほっけのお寺でござい
ます。あつこはもう勝かつやま山でござります、へイ」

「じいさん、どうだろう雨にはなるまいか」

「へイ晴れるとえいけしきでござります、残念じゃなあ、お富士
山がちよつとでもめいるとえいが」

「じいさん、雨はだいじよぶだろうか」

「へいへい、耳がすこし遠いのでござります。へいあの西山の上
がすこし明るうござりますで、たいていだいじょうぶでござりま
しょう。へい、わしこの辺へんのことよう心得てますが、耳が遠うご
ざりますので、じゅうぶんご案内ができないが残念でござります、
へい」

「鵜島へは何里あるかい」

「へい、この海がはば一里、長さ三里でござります。そのちようどまんなかに島があります。舟津から一里あまりでござります」

人里を離れてキイーキイーの櫓声ろせいがひときわ耳にたつ。舟津の森もぼうつと霧につつまれてしまった。忠実な老爺は予の身ぶりに注意しているとみえ、予が口を動かすと、すぐに推測をたくましくして案内をいうのである。おかしくもあるがすこぶる可憐に思われた。予がうしろをさすと、

「へいあの奥が河口でございます。つまらないところで、へい。晴れてればよう見えますがへい」

舟のゆくはるかのかさき湖水の北側に二、三軒の家が見えてきた。

霧がほとんど山のすそまでおりてきて、わずかにつつみのこした渚なぎさに、ほのかに人里があるのである。やがて霧がおおいかくしそうなようすだ。予は高い声で、

「あそこはなんといい所かい」

「へい、あそこはお石いしでござります。あれでもよつぽどな一村でござります。鵜島はあのまえになります、へい。あれ、いま鳥がひとつ低う飛んでましよう。そんなきにぼうつとした、あれが鵜でござります。まだ小一里こでござりましよう」

いよいよ霧がふかくなってきた。舟津も木立ちも消えそうになつてきた。キイーキイーの櫓声となめらかな水面に尾を引く舟足と、立つてる老爺と座しておる予とが、わずかに消しのこされて

いる。

湖水の水は手にすくつてみると玉のごとく透明であるが、打見た色は黒い。浅いか深いかわからぬが深いには相違ない。平生へいせい見つけた水の色ではない、予はいよいよ現世げんせを遠ざかりつつゆくような心持ちになった。

「じいさん、この湖水の水は黒いねー、どうもほかの水とちがうじゃないか」

「へい、この海は澄んでも底がめいませんでござります。へい、鯉も鮒もおります」

老爺はこの湖水についての案内がおおかたつきたので、しばらく無言にキィーキィーをやつとる。予もただ舟足の尾をかえりみ、

水の色を注意して、頭を空くうに感かん興きようにふけつている。老爺は突然先生とよんだ。かれはいかに予を観察して先生というのか、予は思わず微笑した。かれは、なおかわいらしき笑いを顔にたたえて話をはじめたのである。

「先生さまなどにやおかしゆうござりましようが、いま先生が水が黒いとおつしやりますから、わし子どもときから聞いてることを、お笑いぐさに申もうしあげます」

かれはなおにこにこ笑つてる。

「そりや聞きたい、早く聞かしてくれ」

「へい、そりや大むかしのことだったそうでござります。なんでもなん千年というむかし、甲斐かいと駿河するがの境さかいさ、大山おおやま荒れがはじ

まったが、ごんごんごうごう暗くらやみの奥で鳴りだしたそうでござります。そうすると、そこら一面石の嵐でござりまして、大石小石の雨がやめどなく降ったそうでござります。五十日のあいだというもの夜とも昼ともあなたわかんねいくらいで、もうこの世が泥海になるのだって、みんな死ぬ覚悟でいましたところ、五十日めごろから出鳴りでながしずかになると、夜のあけたように空が晴れたら、このお富士山ができていたというこつでござります」

爺さんはにこにこ笑いながら、予がなんというかと思つてか、予のほうを見ている。

「おもしろい、おもしろい、もつとさきを話して聞かせろ。爺さん、ほんとにおもしろいよ」

「せいからあなた、十里四方もあつた甲斐の海が原になつていました。それで富士川もできました。それから富士山のまわりとこるどころへ湖水がのこりました。お富士さまのあれで出口がふさがつたもんだから、むかしの甲斐の海の水がのこつたのでござりません。ここの湖水はみんな、はいる水はあつてもでる口はないのでござります。だからこの水は大むかしからの水で甲斐の海のままに変わらない水でござります。先生さまにこんなうそつこばなしを申しあげてすみませんが……」

「どうして、ほんとにおもしろかつたよ。それがほんとの話だよ」
老爺はまじめにかえつて、

「もう鵜島がめえてきました。松が青くめいませう。ごろうじ

ろ、弁べんてん天さまのお屋根がすこしめいます。どうも霧が深うなつてめいりました」

高さ四、五丈じょうも、周囲二町もあろうと見える瓠ひさぎなりな小島の北岸へ舟をつけた。瓠の頭は東にむいている。そのでつぱなに巨大な松が七、八本、あるいは立ち、あるいは這うている。もちろん千年の色を誇っているのである。ほかはことごとく雑木ぞうきでいつせいに黄葉こしているが、上のほう高いところに楓樹ふうじゆがあるらしい。木こずえの部分だけまっかに赤く見える。黄色い雲の一端くれないに紅をそそいだようである。

松はどうていこの世のものではない。万葉集まんようしゆうに玉松たままつという形容語があるが、真に玉松である。幹の赤い色は、てらてら光

るのである。ひとかかえもある珊瑚さんごを見るようだ。珊瑚の幹をな
らべ、珊瑚の枝をかわしている上に、ろくしやう緑青をべたべた塗りつ
けたようにぼつてりとした青葉をいただいている。老爺は予のた
めに、楓樹にはいのぼつて上じやうたん端にある色よい枝を折つてくれ
た。手にとれば手を染めそうな色である。

みずうみ

湖も山もしつとりとしずかに日が暮れて、うす青い夕炊きの煙
が横雲のようにただようている。舟津の磯いその黒い大石の下へ予の
舟は帰りついた。老爺も紅葉の枝を持って予とともにあがつてく
る。いちゆう意中の美人はねんごろに予を戸口にむかえて予の手のもの
を受けとる。見かけによらず如じよさい才ない老爺は紅葉を娘の前へだ
し、これごろうじろ、この紅葉の美しさ、お客さまがぜひお嬢さ

んへのおみやげにつて、大首おおおつて折つたのぞなどいう。まだ一度も笑顔えがおを見せなかつた美人も、いまは花のごときえみをたたえて紅葉をよろこんだ。晩食には湖水でとれた鯉の洗いを馳走してくれ、美人の唇もむろん昼ほどは固くなく、予は愉快的な夢を見たあとのような思いで陶然とうぜんとして寝についた。

青空文庫情報

底本：「野菊の墓他六篇」新学社文庫、新学社

1968（昭和43）年6月15日発行

1982（昭和57）年6月1日重版

入力：大野晋

校正：小林繁雄

2006年7月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

河口湖

伊藤左千夫

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>